多様な学問をどのように評価するか？

高橋智　筑波フォーラム編集委員
人間総合科学研究科（基礎医学系）教授
（たかはし さとる／発生工学、分子生物学）

「私のプロジェクトと夢」を読んでみて、改めて筑波大学の総合大学としての幅の広さを実感した。言語学研究を通して異なる文化の相互理解を推進しようとする研究・活動や（青木先生）、筑波大学東京キャンパス修了生向けの情報交換サイト設立の話題（倉橋先生）に始まり、平成19年度から採択された「宇宙史一貫教育プログラム」の現状についてのお話や（三明先生）、機械と人の新しい相互関係システムの開発と到達点についての解説（稲垣先生）等、普段生命科学研究を行っている私には大変新鮮に感じられた。また、気象現象の計算科学を用いた研究や（日下先生）、プラズマ研究センターにおける双方向型共同研究の現状（中嶋先生）、更には、エストロゲン受容体の新機能の発見についてのお話や（柳澤先生）、水の学問「水文学」の紹介（浅沼先生）、私が報告した遺伝子改変マウス作製拠点としての生命科学動物資源センターの計画等、言語学から、情報科学、物理学、生命科学までを網羅した非常に幅の広い研究・教育活動が筑波大学内で展開されていることが如実に現れている。筑波大学は国内でも有数の総合大学であり、多様な研究が展開されていることは、ある意味で当然であり、その多様性を持ち続けることが大学として非常に重要であると思うが、法人化となった現在、これまでの様に、それぞれの研究を自由に展開して行く（おそらくその様な体制が学問としては理想と思われるが…）だけでは、大学間の競争を勝ち残って行くことは難しいと思われる。大学として、戦略的に他大学と比較して強い部分をより強化して行く必要があると思うが、それではこのような多様な研究を正確に評価し、強い部分もしくは発展性のある部分を抽出するには、どのようにしたら良いかという点については具体的なアイディアは無い。大学を発展させるためには、学問の目利きが必要であると感じた。